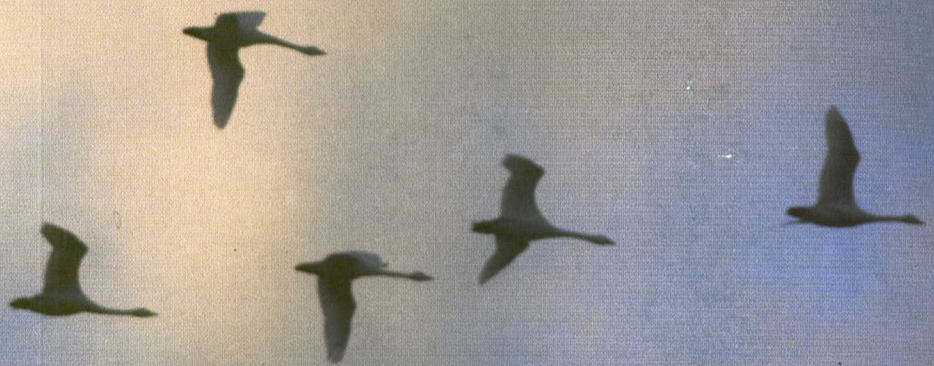
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



2016 graph magazine vol. 39

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 39 定価100円（税込み）



Unser HERR lebt

メッセージ

4 勝利の生活への道　ゴットホルド・ベック

10人の証し

18 みことばは　私の足のともしび　私の道の光です　加藤廉子

24 主のご計画は最善です　小笹靖

31 主よ、感謝します　小笹恵

39 私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした　村上玲子

48 私を満たすお方　小山田忠功

56 主がくださる平安と喜び　小山田千恵

64 賛美の恵みに預かって　野間愛

71 いつも導いてくださるイエス様　野田浩司

79 尽きない主のあわれみと恵み　野田牧子

86 ともに主に祈る幸せ　鈴木美麗

勝利の生活への道

ゴットホルド・ベック

目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。（1コリント　16・13〜14）

このみことばにより、使徒パウロはコリントの兄弟姉妹に勝利の生活への道を示しています。彼らには、それが必要でした。というのは、コリントの兄弟姉妹は多くの問題をかかえて混乱状態にあったからです。パウロの手紙全体は、コリントにいる兄弟姉妹の苦しみに対する、神の応答そのものでした。

コリントの兄弟姉妹は、あらゆる点において、挫折していました。私たちもまた多くの挫折を経験しています。私たちはしばしば主の名誉を汚してしまっています。また、たびたび主の働きの妨げとなってきました。

それでも、次の二つの点は明らかです。一つは、あらゆる信仰者が「勝利の生活」を営みたいと切に願っていることです。第二に、聖書は、勝利の生活がどうしたら私たちに分け与えられるかを、はっきりと示していることです。これは、私たちが勝利の生活を送ることが主のみこころであり、私たちの目標であることを意味しています。みことばは言っています。

ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。（ヨハネ　8・36）

というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。（ローマ　6・14）

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。（ローマ　8・37）

これこそ、私たちに与えられている勝利の約束です。

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。（2コリント　2・14）

これも私たちの勝利を意味しています。コリントの兄弟姉妹に向けて、パウロは「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。」（1コリント16・13〜14）と命令しています。これは、元気を与えようとする忠告などではなく、それ以上のことばです。つまり「福音」が宣べ伝えられているのです。生きておられるまことの神、主は、あらゆる信者が勝利の生活に入ることを可能にしてくれました。主は、命令を実行する力をお与えになることなしにはどんな命令もお与えになりません。ですから、私たちは「忠告」を必要とはしません。必要なのは「福音」です。主イエス様です。

大切なことは、主が命令に従う力を与えてくださることです。このみことばは、理論ではなく、実践を問題にしています。ですから、軍隊の命令のような響きがあります。

主イエス様に出会った兄弟姉妹は、誰でも主の兵卒と言えます。次のみことばを見ましょう。

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。

（2テモテ　2・3〜4）

そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

（2コリント　5・9）

きょう、私たちは、真剣に自分自身に問いかけてみましょう。私のためにご自身のいのちを与えてくださったお方に喜んでいただくことが、私たちの心からの願いになっているでしょうか。主イエス様を信じるだけではなく、主に喜んでいただきたいという心からの願いをもつことが大切です。この願いのない人は祝福され得ないし、用いられません。

きょう、私たちが新たに認識したいことは、自分たちが恐ろしい闘いの中に投げ込まれているという事実です。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

（エペソ　6・12）

しかし、主イエス様に感謝しましょう。最終的な勝利はすでに獲得されているのです。イエス様はご自身の死と甦りを通して、悪魔の力に対する完全な勝利をおさめられました。いまは父である神の右の座に上げられ、坐しておられます。

主イエス様の獲得された勝利が、すべての信じる者の生活の中で明らかにされるため、聖霊が遣わされました。この御霊に働く余地が与えられるなら、私たちは主の勝利にあずかることができます。それは、私たちの勝利ではなく、主イエス様の勝利です。では、この勝利にあずかるために私たちは何をしなければならないのでしょうか。

冒頭のみことばの中で、パウロは五つのことに言及しています。それは次のように言い換えることもできるでしょう。常に警戒し用心すること、信頼によって強められること、成長して完全に大人になること、主にだけより頼み依存すること、すべて愛をもって行うこと。これら五つのことについて、これからごいっしょに考えてみたいと思います。

1常に警戒し用心すること

まず、明確で忘れてならない命令は、「目を覚ましていなさい」です。あなたがたは目を覚ましていなさい。つまり常に警戒し、用心していることが大切です。私たちは夜回りをしている兵士になぞらえられます。兵士にとって、目を覚ましていることは第一の掟です。というのは、敵はどんな瞬間に攻撃を仕掛けてくるか分からないからです。私たちすべての信仰者は用心しなければなりません。「この世」、「肉」、「悪魔」という三つの敵が私たちに対抗しています。絶えず警戒し、用心していないと、この三つの強力な敵が私たちに襲いかかってくるのです。これらの敵について私たちはしっかり対処しているでしょうか。

（1）第一の敵、私たちを取り巻くこの世

コリントは、当時ギリシャの重要な都市であり、商業と教育の中心地でした。町は豊かで美しく魅力的でした。けれども、他方において罪と誘惑に満ちたところでもありました。

コリントの兄弟姉妹は、少し前に信仰に導かれたばかりでした。大部分は偶像礼拝者でしたし、道徳

的に堕落した生活を送っていました。けれども、主イエス様との出会いを通して自分たちの罪が赦されていることを知り、大いに喜ぶことができるようになったのです。「これからは主イエス様のために生きたい」というのが彼らの切なる願いでした。

ところが、彼らを取り巻くこの世は、再び彼らをとりこにし、無力にし、麻痺させようとあらゆる手段で誘惑しました。今も、コリントであろうが、ニューヨークであろうが、東京であろうが、私たちを取り巻くこの世は、私たちを盲目にし、惑わし、快適な生活を欲するようにと誘惑します。次のみことばは、私たちにも当てはまります。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

（1ヨハネ　2・15〜17）

（2）第二の敵、私たちの内に住む肉

第二の敵は私たちの内に宿る肉です。肉とは、根本的に滅びきっており、改善されることのない私たちの生まれつきの罪の性質を意味しています。パウロはそのことを知っていて次のように書きました。

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

（ローマ　7・18）

そしてパウロはどうにもならず、最後に次のように叫んでいます。

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

（ローマ　7・24）

しかし、これで終わりではないとは、なんと素晴らしいことでしょうか。パウロは重荷が降ろされた気持ちで次のようにことばを続けています。

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

（ローマ　7・25）

主イエス様のうちに解放があります。

なんとしばしば私たちは、罪深い自分の性質のとりこになることでしょうか。これは、私たちが肉の罪、あるいは霊の罪を犯すときに明らかになります。それは「ガラテヤ人への手紙」の中で次のように数えあげられています。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。

（ガラテヤ　5・19〜21）

しかし、霊の罪はさらに巧妙で、誇り、批判精神、不寛容などです。私たちはこれらの罪に容易に捕えられてしまうので、常に警戒し、用心していることが大切なのです

（3）第三の敵、悪魔

第三の敵は悪魔です。悪魔は私たちの本当の敵であり、強大な力をもっていて、私たち一人ひとりを駄目にしようと狙っています。サタンはどんな代価

を払ってでも、私たちをわざわいに陥れようと決めています。もし、勝利の秘訣を知らないならば、私たちはサタンの手玉にとられてしまいます。みことばによれば悪魔はいろいろな顔をもっており、ある時には「吠えたける獅子」として近づいてきます。

あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。（1ペテロ　5・8）

別の時には「光の天使」として誘惑します。

サタンさえ光の御使いに変装するのです。（2コリント　11・14）

ですから、私たちがサタンの考えをよく知ることはどうしても必要なのです。パウロは次のように言いました。

私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。（2コリント　2・11）

私たちはどうすればサタンに抵抗することができ、その結果サタンが逃げ出していくかを学ばなければなりません。

この世、肉、サタンは私たちを少しも休ませてくれません。警戒し、用心していなければわざわいです。ですから「目を覚ましていなさい！サタンがあなたがたを陥れないように注意していなさい」という命令はとても大切です。日々、勝利を経験しているのは誰でしょうか。いつも警戒し、用心している人、目を覚ましている人、眠りに陥らない人です。

次に第二番目の点について考えてみましょう。

2信頼によって強められること

「堅く信仰に立ちなさい」。これもまた明白な命令です。他の個所でも言っています。

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。（1コリント　15・58）

ここで大切なのは、信じるだけでなく、「堅く」信仰に立つこと、信頼によって強められるということです。

ある新聞紙面で、一冊の本を読んでいる学生の写真を見たのですが、彼はメガネをかけていてかなり学識があるように見えました。そして面白い見出しがついていました。「成功する人は勉強を始める人ではなく、勉強を始め、かつ本当にその勉強を続けることのできる人です」と。私たちの場合はどうでしょう。

闘いが激しくなり、攻撃もますます度を加えてきて絶望の可能性が非常に大きくなると、私たちはみな疲れてしまい、危険にさらされます。けれども、私たちには、放棄しないで、闘いを続けていくことができる根拠があります。というのは、「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励む」ようにと命令されているということは、このことが主によって可能だからです。

このみことばのあるコリント人への第一の手紙15章、「よみがえりの書」においては、福音の中身が何であるか、そして主イエス・キリストの復活の事実と栄光が何であるかが詳しく述べられています。それと同じように、信仰によって主と結びついている人の復活についても述べられています。さらに、主イエス・キ

リストの再臨、また、死とよみに対する勝利も言及されています。

信仰に堅く立つこと、動かされないことはどうしても必要です。では、そこにとどまり、堅く立って動かされないことを可能にしてくれる内面的な確信の土台は何でしょうか。それは主のみことばです。私たちがより頼むべきものは、主の大いなる約束です。「信仰に堅く立ちなさい！」と言われる時、私たちの信仰の唯一の土台は主のみことばだ、ということをはっきり知っていなければなりません。私たちが考えたり、感じたり、真理とみなしたりするものではなく、主のみことばこそ決定的に大切なのです。パウロはテモテに次のように書き送りました。

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。（2テモテ　2・15）

人は、曲げて聞くこと、つまり聖書を自分勝手に解釈することもできます。いわゆる「聖書批判」は聖書の曲解です。私たちは、聖書の一か所だけを全体の関連から切り離してきて、それによって自分が好ましいと思うことを基礎づけようとしてはいけません。私たちが主のみことばを判断すべきなのではなく、主のみことばが私たちをさばき、整えたいと望んでおられるのです。

さて、「堅く信仰に立ちなさい」という表現で述べられているもう一つの側面は、「主に信頼し続けなさい」ということです。誘惑や試練によって屈服させられることがないようにしなさい。いろいろな困難や悩みがあなたの上に襲いかかり、理解できないような苦しみに耐えなければならないとき、主に対するあなたの信頼を失わないようにしましょう。

悪魔の攻撃目標は私たちの信仰です。私たちがもはや主に信頼しないようにと、悪魔はあらゆる代

価を払って誘惑してきます。もちろん私たちは主を多くの点で理解できません。なぜ、主がこのことやあのことをお許しになるのか、まったくわからないこともたびたびあります。どう考えても、その背後にある意味を少しも理解できません。そうです。それにもかかわらず、信頼に堅く立つことが大切なのです。主は、ご自身がなさることも、ご自分がお許しになることもすべてご存知です。私たちの信頼の土台は主のみことばであり、主の御約束です。「主ご自身がこう言われるのです。（大切なのはそれだけです）『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。』そこで、（つまり、唯一の土台であるのは主の約束です）私たちは確信に満ちてこう言います。『主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。』」（ヘブル13・5～6）

私たちが主の勝利にあずかるためには、まず第一に、いつも警戒し、用心して眠り込まないことです。第二に主への信頼によって強められることです。その土台は主の真実なみことばです。主のみことばに基づいて、私たちは信頼することができます。主は決して失望させないお方です。

次に第三の点についてみましょう。

3成長して完全に大人になること

「男らしくありなさい」という表現は、成長して大人になる、つまり本当の意味で成長することを意味しています。ここで問いが生まれます。私たちは主イエス様のものとなって、どのぐらいの時がたっているのでしょうか、私たちは霊的な領域において、いまも幼いままなのでしょうか。

私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。

（1コリント　13・11）

これはパウロの告白でした。私たちの場合はどうでしょう。私たちも「子どものことをやめた」でしょうか。未成熟のしるしは、聖書によると「ねたみや争い」があることです（1コリント　3・1～3）。成熟は一致をもたらします。

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

（エペソ　4・13）

大切なことは信仰の一致に達すること、御子イエス・キリストに関する知識の一致に達すること、完全に大人になることです。でも、これはどうすれば可能なのでしょうか。どうすれば私たちは信仰によって強められ、成長することができ、もはや幼子ではなく、大人として信仰生活を送ることができるのでしょうか。

私たちすべてにとって明らかなことは、これが自分の力では絶対にできないということです。私たちはなぜいくども挫折を繰り返すのか、その原因は私たちが自分の力で勝利を得ようとすることです。すべての挫折は、私たちが主の御霊の導きと働きに従う代わりに、自分の力でやろうとしたということを示しています。私たちが挫折するのは当然です。というのは、私たちはとうてい不可能なことを自分でやろうとするからです。だれ一人として、自分の力で勝利の生活を送れるほど強い人はいません。つまり、主イエス様がご自身の勝利の生活を私たちの中に生かすことがおできになるためには、私たちが主に働いていただく余地を与えることが必要ですが、私たちはその代わりに、自分の力で勝利の生活を送ろうとしてしまうのです。私ではなく、私の内におられる主キリスト、これこそが勝利の秘訣です。

私たちに次に命令されている「強くありなさい」という意味を考えながら、このことについてみてみましょう。

4 主イエス様だけに、より頼み、依存すること

「主イエス様だけにより頼み、依存する」。これが私たちの標語となっていれば幸いです。なぜなら、自分の力でやろうとすることは、まったく無意味だからです。私たちはこの世に生きていて、この世界とこの世の霊によって影響されずに生活することはできません。私たちは自分自身の堕落した性質を直したり、克服したりすることはできないのです。自分の力で悪魔に対抗して勝利を勝ち取ることは絶対に不可能です。ですから、使徒パウロはエペソ人への手紙に次のように書いています。

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

（エペソ　6・10）

聖書のどこにも、一生懸命に努力して自分の力で強くなりなさい、とは書かれていません。主にあって強められなさい。主イエス様の大能と力によって強められなさい、と聖書は言っています。さらにパウロはことばを続けて、神の武具を身につけることが、この闘いで勝利者となるために、どうしても必要だと記しています。

邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。

（エペソ　6・13〜17）

私たちの腰には真理の帯を、胸には義の胸当てをつけなければなりません。そして私たちは平和の福音を宣べ伝える備えをしていなければなりません。信仰の大盾が意識的に用いられなければなりません。必要不可欠なものは、御霊の与える剣としての主のみことばです。

だれ一人、敗北を喫する必要はありません。私たちが挫折したのは自分の力でやったからです。悪魔は私たちのちっぽけな試みを見て、あざわらいます。決して自分により頼まないようにしましょう。

私たちは、どうすれば主イエス様の勝利にあずかれるのでしょうか。

一、いつも警戒し用心していることによって
二、神のみことばに信頼し、
　主により頼むことによって
三、子どものことをやめて
　大人に成長することによって
四、いかなることがあっても
　決して自分自身をあてにしないことによって

最後にもう一つの大切な点を見てみることにしましょう。

5すべて、愛をもって行うこと

「いっさいのことを愛をもって行いなさい」。私たちが愛によって、しかも、主である神の愛によって満たされることがすべてにまさって大切です。神の愛は私たちの生活の中で明らかにされなければなりません。主である神の愛は、私たちの行いによって示され、私たちのことばの中で聞かれるようでなければなりません。それはどのようにして可能なのでしょうか。

なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・5）

このみことばによると、新しく生まれ変わった人は誰でも聖霊によって神の愛を持っています。御霊はすべての信仰者に与えられており、御霊の実は愛であると聖書は言っています。主である神の愛で満たされるためには、聖霊によって満たされなければなりません。あらゆるキリスト者の特徴はこの愛であるべきです。

あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。

（ヨハネ　13・34〜35）

勝利の生活への道について考えてきました。大切なことは、この知識を実践に移すことです。その覚悟があれば、私たちの生活は変えられ、大いなる喜びで満たされます。主イエス様は私たちを、主の名誉と栄光のために仕えるようにと、お用いになるに違いありません。

みことばは　私の足のともしび
私の道の光です

加藤　廉子



前列右が廉子さん、ご家族といっしょに

私は一九二年に山口県防府市で二男二女の長女として生まれました。小さい頃は体が弱くてよく病気をしました。七歳のころ肺炎にかかり、死ぬほど苦しかったので母に「死んだらどこに行くの？」と尋ねたそうです。父母は浄土真宗に帰依していたので「死んだらお浄土で生まれかわり、仏様がいらっしゃる夢のようなところに行くのよ」と聞かされました。父母の影響で「南無阿弥陀仏（なみあむだぶつ）」を唱えれば救われると子供心に信じていました。

昭和十六年に結婚して長男、長女、次男を授かりました。夫は二度召集されましたが無事に帰還し、戦災にも遭（あ）わずに済みました。戦前、戦中、戦後といろいろな苦労がありましたが、国民全体が耐乏生活でしたので、自分なりに工夫し一生懸命生きました。特別悩むこともない生活で、幸せな日々を過ごすことができました。

平成二年、夫は肺炎を患い二週間ほどの入院の末

に亡くなりました。残された私は、目標もなく、老後をただ待つことに疑問を感じながら、空しい日々を送っていました。

その頃、大学在学中の孫が心の病に苦しんでいることを聞きました。人一倍心配性であるにもかかわらず、ただ「南無阿弥陀仏」を唱えることしかできない自分を悲しく思っていました。他方、娘からは苦しみの中でイエス様に救われたと知らせがありました。私は、人は自分の力では何もできない、と知っていましたから、娘が信仰をいただいて歩むことになって「よかった！」とほっとしました。娘は、聖書や福音のテープを送ってまいりましたが、私には先祖からの宗教が大事だと思う思いが強く、なかなか受け入れる気持ちにはなれませんでした。

そのような時に孫から電話があり、「退院したいと先生に申し出たら『おばあちゃんと一緒に生活するならいい』と言われた」と聞きました。矢も盾もたまらず息子たちに、遠くにいて何もできずに心配しているより、孫と一緒にいて思いを聞いてあげ、苦しみを分け合いたいと話しましたら、「お母さんがそうしたいならいいよ」と了解を得ました。孫の両親である娘夫婦は、老齢の私を気遣って反対しましたが、ただ目標もなくいたずらに空しく人生を過ごすことの辛さを話し、強引に孫が住んでいる阿蘇に飛び込みました。ただ前だけを見て・・・。

あの時のことを思い出すと、小心者で井の中の蛙の私にどうしてそのようなことができたのか、とまことに不思議な気がします。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

孫とともに阿蘇に住むようになり、大自然の中に一歩を踏み出しました。長い間住み慣れた街中の生活から解放され、大きな自然に囲まれ、孫と私と子

犬のジョンの二人と一匹の生活でした。何もかも初めてのことばかり、苦しいとか辛いとか考える暇はなく、その日一日のことだけで精いっぱいでした。それまではいつも周りの人を気にしながら行動していましたが、すべてが一変しました。迷うことばかりでしたが、そんな時は、天を仰ぎ、自分の思いを声に出して祈りました。お寺では「南無阿弥陀仏」をただ唱えるばかりで、具体的な願い事を祈ることはありませんでした。イエス様に救われている確信はまだなかったのですが、祈れることは喜びでした。

イエス様は私のことをすべてご存知で、私のために阿蘇での生活を与えてくださったことを後で知りました。孫を助けるために山口から来たのにイエス様が私を救ってくださって、良くしてくださったことは驚くばかりの恵みでした。イエス様しか頼ることができないことを教えられました。

七十六歳で阿蘇に行き、翌年別府で洗礼を受けました。

疲れると外に出て自然に囲まれ草木や花々、見るものすべて主が造られたものに癒され、夜は満天の星、一日の疲れは吹き飛びます。万物を主が創造されたことを、聖書を通して知って感激でした。辛さより喜びでいっぱいでした。

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。

（詩篇　8・3～4）

六月には野イチゴが可愛い実を付け、ルビーのような実を摘むたびに「イエス様ありがとうございます！」と感謝でいっぱいでした。孫は先にイエス様に救われていたので、体調の良い時には二人で聖書を通読したり、孫からイエス様の話を聞いたりしました。時には自分がしていることに不安を感じることもありましたが、これで良いのでしょうかとイエス様にお聞きしますと、このみことばが与えられました。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

（箴言　3・5～6）

毎週、孫と一緒に熊本集会に集い、兄弟姉妹の祈りに支えられ、イエス様のご愛がいかに深いかを知らされました。郷里に住んでいる次男ががんで召された時は、天国で会える確信を頂き、耐えることの大切さをも教えられ、主は必ずすべてを益にしてくださると信じての毎日でした。

二〇〇〇年ドイツの喜びの集いに孫娘と参加しました。この時の喜びは忘れることができません。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

阿蘇へ来て六年目ごろから孫の状態も良くなり始めました。「孫にとって私が必要でないと思召（おぼしめ）したら、みこころに従いますから教えてください。どのようになさっても従います」と祈りました。主が与えてくださるものを喜んで受け入れることの大切さ、を分からせていただきました。

八年目の三月のことでした。例年通りおひな様を飾った翌日、朝食をすませ後片づけをいつものようにしていましたら、急に「ここを出なさい！」と押し出されるような思いが与えられました。これはイエス様

からだと感じ、孫に「おばあちゃん、ここを出ようかね？」と言うと、孫は反論もしないで「いいよ」と言いました。不思議な一瞬の出来事でした。後先のことを考える余裕もなく、娘に電話して「阿蘇を出ることにした」と言うと驚いて飛んでまいりました。「何かあったの？」と心配そうに聞きますから「イエス様から：」とだけ返事をしました。孫と楽しく話をしている私を不思議そうに見て、「もう一晩考えたら」と申しましたが、イエス様のみこころに従う気持ちは変わりませんでした。

一人暮らしを始める孫のために数日間の食事を用意して、気持ちよく別れることができました。今思い出しても本当に不思議な体験でした。イエス様は生きておられ、私たちの祈りを聞いていておられ、一番良い時にかなえてくださることを確信しました。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

阿蘇を離れて、娘夫婦のいる福岡に移り住みました。しばらくの間、残してきた孫のことを考えるとどうしようもなく落ち込みましたが、すべてはイエス様がなさること、私が煩ったりしてイエス様の邪魔をしてはいけないことに気づき、この時を大切に前向きに歩むことを教えられました。娘夫婦と一緒に九州各地の集会に行ったり、全国の喜びの集いにも参加する恵みを次々といただきました。娘夫婦一家と一年余り同居しましたが、主はスープの冷めない所に今の家を与えてくださいました。

八十八歳で大腸がんの開腹手術を受け、九十歳で脳梗塞、九十二歳で帯状疱疹と次々と病気をいただいています。後遺症の神経痛は続いており、イエス様の十字架の痛みをほんのわずかでも偲ぶような毎日ですが、一人暮らしが何とか続けられる喜びをいただいています。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

（詩篇　119・105）

十年ほど前から、朝起きると先ず『日々の光』の、その日のみことばをノートに書き写します。すると気持ちがすっきりして平安になります。それから朝食の準備をして一日が始まります。今は毎週、福岡集会の礼拝に集っていますが、兄弟姉妹とのお交わりがとても楽しみです。毎週火曜日には娘夫婦の家に行って、テレビに映るインターネットの学び会を聞いています。回数は減りましたが、月に一度、姉妹方が家に来てくださり、共に祈りあえるのが嬉しいです。感謝なことばかりです。もうすぐ九十四歳になります。イエス様のご再臨の日を心待ちにしながら一日一日を大切に、祈りの日々を送りたいと思っています。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

（1テサロニケ　5・16～18）

加藤廉子
一九二二年山口県防府市出身
防府高等女学校卒
長男・紘一郎
長女・重枝由紀子
二男・真人（五十五歳で召天）

10人の証し

Unser HERR lebt

主のご計画は最善です

小笹　靖



妻の恵さんと

私は一九五五年、大阪の八尾で生まれました。祖父母、両親、叔母、姉、兄の八人で暮らしていました。家の近くにはお寺の住職をしている親戚がおりました。聖書とはまったくと言っていいほど無縁な者でした。

大学四年の時に、体には自信があった父が糖尿病を患い検査入院することになりました。私たち家族は、一か月ほどで退院すると思っていましたが、体調が急変し、帰らぬ人となってしまいました。あまりにも急なことで受け入れることができず、ただただ悲しくて悔しくて、父は死後どこに行ったのだろうかという虚しさと、わが子を先に亡くした祖母の姿を見るのが、とてもつらかったことをはっきりと覚えています。

社会人になってからは、大きな問題もなく歩んでいました。一九八七年に友人の紹介で知り会った妻と結婚しました。週末には趣味のテニスやジョギングを一緒にし、楽しんでいました。ところが、結婚して十年後の四十二歳の時に、大きな試練が与えられました。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（1ペテロ　4・12〜13）

印刷関係の会社に勤務し十五年ほど工場で働いていましたが、その後営業への配置転換がありました。慣れない営業の仕事にストレスは溜まっていくばかりでした。休日にスポーツをすることでストレスを発散させていましたが、それは一時的な対処法であって、仕事の悩みの根本的な解決にはなりませんでした。弱音を吐いてはいけないと、自分の力を信じ頑張っていましたが、私の体と心は限界を超え、体調は日々悪くなっていきました。不眠や食欲不振が続き、焦燥感と経験したことのない不安感が襲いかかってきました。やがて、会社に行くことができなくなり、半年ほど会社を休職することになりました。診察の結果、自律神経のバランスが崩れたことによる不安神経症であると診断されました。

なぜ自分がこんな苦しい思いをしなければならないのか、仕事に復帰できるのだろうかと、いつも自分のことばかり考える状態が続きました。（信仰を与えられるようになってから、そのような自己中心の思考や行いが、罪であることを知り、私たちの罪の問題を解決してくださるために、身代わりとなって十字架の上で死んでくださったイエス様の尊いみわざを知りました。）

まったく光が見えず家で悶々としていた時、会社から職場環境を変えてはどうかという話をいただき、大阪営業所から名古屋営業所に転勤することになり、不安の中、職場に復帰することになりました。

引っ越しの時に、妻は同じマンションに住んでおら

れた知り会いの方から、「光よあれ」の本をいただいたようです。名古屋での生活が始まりしばらくしてから妻は、その本の巻末に書かれてあった連絡先である河合兄姉宅に電話をし、名古屋集会のことを聞いたようです。そして後日、妻から誘われ二人で礼拝にいくことにしました。罪のこと、イエス・キリストの十字架の贖いやよみがえりについては、まったくわかりませんでしたが、名古屋集会の兄弟姉妹が私たち夫婦を温かく迎えてくださったことは、今でもはっきりと覚えています。これらのことすべてが主のご計画でした。そして始めて聖書のみことばに出会うことができました。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。（1テサロニケ　5・16〜18）

一九九九年、豊橋喜びの集いで受洗の恵みに与りました。上記のみことばは、これからの人生、夫婦が同じ信仰に立つことができますようにと、受洗のときにいただいたものです。名古屋キリスト集会に集い始めて二年目の出来事でした。主が最善のご計画をしてくださり、主の働きによってイエス様を救い主と信じ、共に歩む者へと変えてくださいました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。（マタイ　11・28〜30）

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。（マタイ　6・34）

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

これらのみことばに出会い、私の心は慰めと励ましを受け、生きる希望と力が与えられ、みことばに信頼して歩んでいきたいと強く思いました。しかし、その思いを持続することは難しいことでした。なぜなら、私は祈ることが少なく、主との交わりがあまりにも少なかったからです。努力して信仰を保つことはできません。主の憐れみと、御霊の助けをいただかなければならないことを知りました。そのためには、正直にありのままの状態を主に祈ることが必要でした。祈らなければ、主は聞いてくださることもできず、働いてくださることもできないのです。祈らないことは不信仰の罪であることを示されました。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。

人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・26〜28）

名古屋での仕事や生活にも慣れ、これからという時、妻の父が脳梗塞で倒れ亡くなりました。二〇〇一年大阪営業所に戻ることになり、妻の母と三人で、妻の実家の京田辺で暮らすことになり、芦屋集会に集うことになりました。

二〇〇五年五月、名古屋集会で親しく交わっていただいた新井兄弟が天に召されました。入院中にお見舞いに行きましたが、病室は祈りと賛美で平安に満ちあふれていました。死を直前にして、これほどの平安の中におられる兄弟の姿を目の当たりにして、「主は生きて働かれるお方であること」を知り、主に信頼したいという思いが強められました。

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。

（ヨハネ　14・27）

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

（ローマ　10・11〜13）

二〇〇七年ドイツ喜びの集いに参加することができました。一週間も会社を休むことは無理だと諦めていましたが、主は私たち夫婦の祈りと願いを聞いてくださり、最善の計画を成し遂げてくださいました。

兄弟姉妹との交わり、メッセージや証を通して、主が一人ひとりを愛してくださり、いつも共にいて守り、導いてくださり、いつも恵みを注いでくださっていることに、心から感謝することができました。たくさんの恵みを頂いて喜んで帰国することができました。

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。

（詩篇　81・10）

主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。

（詩篇　116・12）

たくさんの恵みをいただき、主は私たち夫婦に良くしてくださいました。私たちも主のために奉仕したいという思いが与えられた時、家庭集会が備えられました。今までは、ゲスト気分で家庭集会に参加していましたが、奉仕されている兄姉の働きを体験することができ、改めて感謝することができました。

また、多くの兄弟姉妹の祈りや奉仕にも支えられていることも実感しています。私たちの周りにはまだ救われていない家族や、友人、知人がたくさんいます。この家庭集会が、主のために大いに用いられ、ひとりでも多くの方が、主の愛を知ることができ、救われて永遠のいのちを持たれることを願っています。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

心の病という大きな試練を与えられましたが、すべてが主のご計画であり、最善であることを知りました。試練が与えられたことは、「私にとって必要だっ

たから」と言えるようになったのは、とても感謝なことです。試練に会わなかったら、救いを求めることもなく、イエス様との出会いもなかったでしょう。イエス様との出会いによって、滅びの道から永遠のいのちの道へと方向転換することができました。イエス様の一方的な憐れみと恵みに感謝しています。家族の救いはイエス様の約束ですから、諦めたり、つぶやいたりしないで、最後の一瞬まで、希望をもって祈り求めたいと思います。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。あなたの御口のおしえは、私にとって幾千の金銀にまさるものです。
（詩篇　119・71〜72）

主よ。あなたは私の神。私はあなたをあがめ、あなたの御名をほめたたえます。あなたは遠い昔からの不思議なご計画を、まことに、忠実に成し遂げられました。
（イザヤ　25・1）

小笹　靖（こざさ　やすし）
一九五五年大阪府八尾市出身
八尾市立久宝寺小学校、久宝寺中学校、
大阪府立布施工業高校、近畿大学理工学部卒
中本パックス株式会社勤務
妻　恵

主よ、感謝します

小笹　恵



左から夫の靖さん、恵さん、恵さんのお母様の澄さん

私は一九六一年京都で生まれました。両親や親族からたくさんの愛を受けて成長できたことはとても感謝でした。父は行動力があり実直な人でした。仕事人間でしたが、家族を大切にしてくれました。旅行や食事に出かけた思い出が多くあります。母は独身時代に聖書と出会い教会に通っていたようです。父の転勤に伴い家族は大阪、埼玉、千葉と引越し、私の高校受験で関西へ戻りました。埼玉では友人に誘われ、近所の教会の聖歌隊に入りました。教会での賛美やクリスマスの降誕劇は、子供心に印象深く「天国には神様がおられ、見守っておられる」と素直に信じたことを記憶しています。学生時代を終え就職し「親元を離れ自立する」と勝手な思いで二年ほど自活し一九八七年に結婚しました。同じ趣味を楽しんで過ごし、友人にも恵まれ順調でした。七年ほど過ぎた頃、父が二度目の脳梗塞で倒れ手術をすることになり、心労で母も入院し、自分たちの生活リズムが崩れるのを経験しました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。
（マタイ　7・7）

幼いころの体験を思い出し「神様助けてください。どうか守ってください」と祈りました。その後、両親共に落ち着き、感謝しました。次に、夫がオーバワークと心労のため、会社に行けなくなり、外出もできず人と会うことも拒み沈んでいきました。半年ほど休養し、転勤を勧められ、名古屋に引越すことになりました。引越しの際、隣人のキリスト集会の姉妹から集会の雑誌「光よあれ」を頂きました。以前、従姉から集会の話や福音の話を聞いたことを思い出し、名古屋の兄姉宅を訪ねました。温かい兄弟姉妹の誘いを受けて、夫婦で家庭集会や礼拝へ出掛けました。何かの拠り所を求めていたのだと思います。礼拝での賛美は、幼いころの記憶がよみがえり懐かしく心に響き、安住の地にたどり着いた思いがしました。神様を中心として夫婦で歩みたいと願うようになり、一九九九年豊橋喜びの集いで、夫と共に受洗の恵みにあずかりました。何か不思議な大きな力で導かれた気がしました。背後には神様のご計画と兄弟姉妹の大きな祈りの働きがあったと思います。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。
（1テサロニケ　5・16～18）

御代田や各地の家庭集会へ集い、多くの兄姉との交わりも与えられました。その年の夏、父が再び倒れ、イエス様に委ねることを伝えました。それが最期となりましたが、主が父の魂を引き上げてくださったと信じることができ、父の希望どおり無宗教でお別れ会を行うことができました。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（2コリント　4・18）

集会の葬儀や証（あかし）を通して、父の死も永遠の別れではないと受けとめることができました。秋には、大府喜びの集いで、母も長年遠ざかっていたイエス様と再会し、家庭集会や喜びの集いにも参加するようになりました。イエス様と出会い、主の家族としていただいた喜びに溢れ勇んでいました。二〇〇一年秋、母との同居のため関西へ戻りました。夫の仕事は多忙になり、長時間通勤で心身とも疲労困憊（こんぱい）し、簡単に喜んで集う状況ではなくなりました。体調の不調を心配する夫と気兼ねする母との間で私は疲れ、自己嫌悪に陥りつつも相手をさばき、つぶやくようになりました。

善を行なう人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・12）

何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。
（ローマ　4・5）

私には取り去れない自己中心の罪が潜（ひそ）み、イエス様の十字架の贖いはそのためであることを改めて知りました。このとき、初めて罪を意識した悔い改めの祈りをしました。

たとい山々が移り、丘が動いても、わたしの変わらぬ愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。」とあなたをあわれむ主は仰せられる。（イザヤ　54・10）

神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らないでください。あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。
（詩篇　51・10～12）

今思い返すと、イエス様を知った初めはただ喜んでいました。次に取り去れない自我の罪を示され、主を恐れることを深く感じるようになりました。

きょう、あなたは、上は天、下は地において、主だけが神であり、ほかに神はないことを知り、心に留めなさい。
（申命記　4・39）

わたしが、あなたの神、主である。わたしはあなたをエジプトの地から連れ上った。あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。
（詩篇　81・10）

二〇〇五年、敬愛する新井兄弟が天に召されました。名古屋在住中、親しく交わりをしていただきました。お見舞いで伺った病室は穏やかな空気の中、付き添いの姉妹方と主に在る家族の団欒を味わっているようでした。御霊のみたしをいただいて帰り、その夜から二人で「兄弟が最期のときまで守られますように」と祈りました。召される当日にも再度、見舞うことができ、肉体は凄まじく弱っておられましたが、挨拶をすると手を出して応えようとされました。祈りのノートを見せていただきました。兄弟の信仰の結末を見せていただき、より一層、主のお力とご臨在を感じました。

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。
（2コリント　4・16）

二〇〇七年と翌八年に海外の喜びの集いに参加する恵みをいただきました。定年に至るまでは無理だろうと諦めていたのですが、祈り始めると整えられ、実現された主のみわざを体験しました。温かく迎えてくださり、献身的に奉仕してくださった海外の主に在る兄弟姉妹方に感謝し、各集会の兄弟姉妹との交わりを楽しみました。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。
（詩篇　133・1）

あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎを与える。主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。
（ゼパニヤ　3・17）

海外の喜びの集いの後、主が私に内住してくださり、いつも導いておられる方であることを確信できるようになりました。その後、家庭集会を持つことになり、いくつかの恵みが与えられました。我が家には父方の先祖の仏壇があり、それを取り除かなければ中途半端であると感じていました。祈り始めると取り去られる方向に事が動きました。その結果、親族に対しても隣人に対しても、先祖崇拝、偶像礼拝をしない、主イエス・キリストを信じる信仰を明らかにすることができました。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」
（ルカ　18・27）

時が来れば、わたし、主が、すみやかにそれをする。
（イザヤ　60・22）

母のリバイバルも主のご計画の一つです。家庭集会や祈り会を通じてみことばに多く触れ、集会の同世代の姉妹方との交わりを喜び、二〇〇九年近江八幡喜びの集いで洗礼の証にあずかりました。

あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにす

10人の証し

Unser HERR lebt

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。あなたがたの心を神の御前に注ぎ出せ。神は、われらの避け所である。

（詩篇　62・8）

家族で主を信じていても、日々の生活では一致していくことは難しく「わたしが一番耐えている」と主張したくなる高慢な自我が心を支配します。「一番忍耐しておられるのは主イエス様である」と悔い改め、立ち返るとき、主を見上げ、感謝できる幸いを実感し、全幅の信頼をもって主に委ねることができます。毎晩、母の就寝前に三人で祈りました。「主よ、今日の一日を感謝します。主よ、あなたの御心を成してください」

る。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・4）

母は、私たちと共に礼拝や各地の集いに出かけ、みことばと祈りを中心として暮らしていました。二〇一五年一月四日の礼拝後、足腰が立たなくなり、日に日に身体能力は衰え、寝たきりの介護生活となりました。訪問看護や介護の方々にお世話をしていただきながら三月五日朝、自宅で召されました。急激な体調の変化に、母も私たちも戸惑いました。衰えていく肉体のケアと御国への備えをしようとしている霊とのバランス、そのどちらを重視したらよいのか、何が一番ふさわしいのか分かりませんでした。すべてのことは神のご計画であり、最善であることを確信しつつ、心騒ぐ思いを祈りで打ち明けるとき、みことばで平安が与えられることを再び体験しました。

あなたの神、主が、私たちの歩むべき道と、なすべきことを私たちに告げてくださいますように。

（エレミヤ　42・3）

私たちは良くても悪くても、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。私たちが私たちの神、主の御声に聞き従ってしあわせを得るためです。

（エレミヤ　42・6）

この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。主があらしを静めると、波はないだ。波がないだので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをその望む港に導かれた。（詩篇　107・28〜30）

生前から葬儀のことも相談していましたので、聖書に基づく形で、兄弟姉妹の祈りと助けをお借りして自宅で行うことができました。親族やゆかりの方々、ご近所の方も来てくださり、福音を聞いていただけました。すべてのことが平安のうちに進み、大きな主の御腕に守られているようでした。母が住まいを天に移したことで、天国での再会の希望が増します。

あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

（コロサイ　3・2）

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

（ピリピ　3・20）

今は、イエス様を知るきっかけとなった夫の病に感謝しています。そのときは苦しくても、そのことを通してイエス様に出会うことができたことは、本当に幸いです。性格も違い、異なった環境で成長した者が、共に永遠のいのちの恵みをいただき、見上げるべきと

ころ目指すところが同じ、ということは何にも代(か)えがたいワンダフルギフトです。

二〇一〇年から夫婦で賛美に参加する恵みもいただいています。賛美するとき、召された両親、兄弟姉妹と共に、天でも地でも高らかに歌う中に包まれ、天国を先取りしているように感じます。

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。(イザヤ 9・6)

主は忍耐をもって私のような者を愛してくださり、導いてくださり、憐れんでくださいます。いつもイエス様と兄弟姉妹の祈りに支えられています。

「わたしはあなたがたを愛している。」と主は仰せられる。(マラキ 1・2)

主であるわたしは変わることがない。(マラキ 3・6)

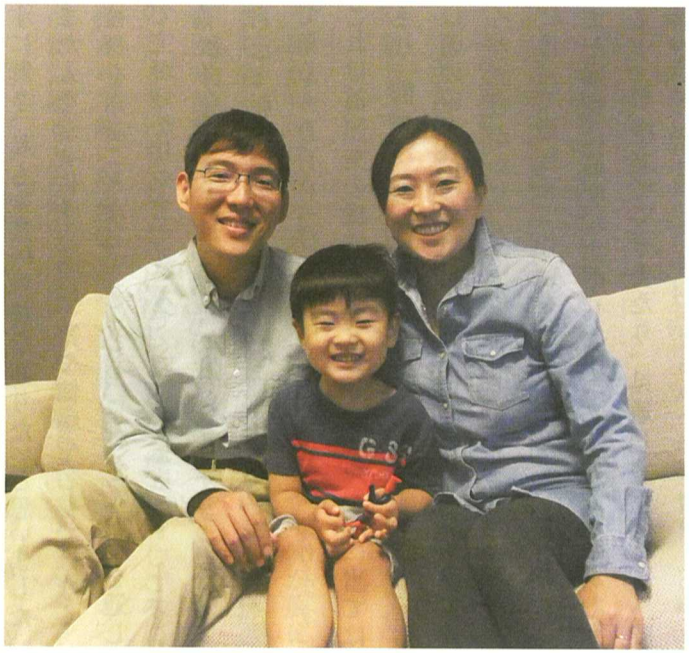
信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。(ヘブル 12・2)

神の家族としていただいたこと、その導き、愛され守られていること、すべてに感謝します。

小笹 恵(めぐみ)
一九六一年京都市出身 新座市立東北小学校、千葉市立椿森中学校、京都市立城陽高校、京都外国語大学独語科卒
夫・靖 母・山岡澄(すみ)(二〇一五年三月五日召天)

私の上に翻るあの方の旗じるしは愛でした

村上 玲子



右から玲子さん、喜一くん、夫の浩生さん

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。(ガラテヤ 6・14)

私は一九七八年に父・佐々木壮吉、母・史子の間に生まれ、兄と弟の五人家族の中で何不自由なく育ちました。クリスチャンファミリーではありませんでしたが、幼いころから漠然と神様を信じていました。神様は優しいけれども厳しく、心の内をすべてご存じであると思っていました。

イエス様が私に臨んでくださったのは小学校の四年生のころです。転校して虐(しいた)げられていたとき、図書室で星野富弘さんの本を見つけて読みました。事故で首から下が動かなくなり絶望の中にいた星野さんが、聖書の神様に出会い喜びで満たされているよう

すに驚き、私も聖書の神様を知りたいと思いました。また人を幸せにするのは、富や健康や名誉ではなく、神様を知ることだということを、星野さんの姿を通して主が分かりやすく教えてくださいました。

私自身は、生まれつき気が強く、男勝（まさ）りで、自己主張が強いのです。また、私には発達障害の一種であるＡＤＨＤ（注意欠陥多動障害）があります。これは前頭葉の機能不全であり、数％の人に当てはまり、衝動性、多動性、不注意が特徴です。私の場合は頭の中が常にグルグル回り、いつもひらめいているような感覚があり、なにかをしていると、他のことが頭に浮んで最後まで作業をやり遂げることができず、また反対に過度に集中し過ぎてしまう傾向があります。順序立てて考えたり、見通しを立てたり、時間通りに行動することも苦手で、忘れ物やうっかりミスも多く、小学生のころから集団生活や日常生活にさまざまな困難がありました。

親や先生に叱られても改善することができず、怠けていると思われました。卑（いや）しめられた経験も加わり、人の目や評価を気にして失敗をごまかし嘘をつく、という自分の内側にある罪に徐々に気がつくようになっていきました。私がイエス様に出会い救われたのはずっと後なのですが、そのころから御霊が働いてくださっていたのだと思います。

話は戻りますが、星野さんの本を読み、聖書の神様を知りたくてカトリックの女子校に中学から六年間通いました。賛美歌やみことばは好きでしたが、救いは与えられませんでした。宗教は人が作った組織であり、そこに所属することでは救われないことを体験的に知ることができたことは感謝でした。

私の罪で私は不安になっています。（詩篇　38・18）

このみことばのとおり、自分の罪を知っているのに救いが分からないのは不安そのものでしたが、二十四歳のときイエス様の十字架について聞き、望んでいた救いが突然与えられました。

子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。（ヘブル　2・14～15）

罪からの解放と共に、神様の深い憐れみと愛が胸に押し寄せ、喜びと感謝で涙が止まらず、深く暗い海の底から、光り輝く空中に飛び出したようで、息をするのさえ楽になったように感じました。母も同じころに救われ、一緒に聖書を読むようになりました。

特に嬉しかったのは次のみことばです。

私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。（ローマ　8・38～39）

その後、母が書店でベック兄の書かれた「神の愛」「絶えず祈れ」「実を結ぶ命」「光よあれ」を買ってきました。それらの本を読んで、吉祥寺集会に集いたいと思い、二〇〇七年一月に母と共に吉祥寺集会に集いました。

初めての礼拝では、多くの兄弟姉妹と共にイエス様を礼拝し賛美することが嬉しく、兄弟方のへりくだった祈りが印象的でした。兄弟姉妹とのお交わりが嬉しくて、喜びの集い、家庭集会、祈り会にも可能なかぎり参加しました。

自分が罪を犯す者であることは知っていましたが、

10人の証し

Unser HERR lebt

まったく役に立たず、罪の塊であり、芯まで腐り切ったみじめな者であることを、集会に来てからさまざまな体験を通して知りました。しかしこんな者のために十字架にかかってくださったイエス様を見上げるとき、主ご自身が私を満たし、不可能を可能にし、その時々に与えてくださったみことばを成就してくださることを何度も体験させていただきました。

大学を卒業してから理学療法士として働いていましたが、私にはストレスの大きい仕事でした。自分の力に頼って頑張っていたときは失敗の連続で疲れ果てましたが、救われてからは仕事の前に祈って主に委ねると、ミスも少なくなり、必要な助け手が与えられ、淡々と目の前のことをするだけで、すべてがスムーズに進み周囲から実力以上の評価をされてしまうほどでした。

主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。（2コリント　12・9）

もしＡＤＨＤでなかったら私は、自分の罪や弱さに対し目を閉ざし、救われていなかったかもしれません。主の恵みも、こんなにありがたく味わい深いものではなかったかと思います。なぜこのような性質を与えられたのだろうと悩んだこともありますが、私が主を求め、救われ、主の御力により頼むためにどうしても必要であったと認めざるをえません。

結婚の導きとその後の恵み

私は人との長期的な関わりが苦手でしたので、結婚したい思いはありましたが内心不可能だと思っていました。しかし主にある兄弟姉妹は、初めから私がダメで絶望的な者であることを知っていて、私を見るのではなく、共に主を見上げてくれます。私がダメな者であることを知っても、「人の心はみんな陰険で

直らないんだよ」と言ってくれるのです。

同じ信仰を持つ人とであれば、十字架を見上げてお互いに祈り合えるのではないかと思い、結婚の導きを祈るようになりました。

彼に信頼する者は、失望させられることがない。
（ローマ　9・33）

祈って待っている間は結婚が信仰の目的のようになり、主のみこころではなく自分のことしか考えていないということが示されました。救われたときは、残りの生涯をイエス様に捧げたいと思っていましたが、結婚を祈り始めてからは焦点が自分の願いに向けられていました。

私自身も私の結婚も主のものであると示され、「この身を主がご自由になさってください」と祈ると一週間後に浩生さんを紹介されました。紹介してくださった兄弟からは「わたしの願いではなく、みこころの通りにしてください、と祈ると良いよ」と言われました。その兄弟のアドバイス通り、初めて会ったときは浩生さんを結婚相手として考えられませんでした。彼も私に対してまったく同じ感想だったようです。しかしその後二人とも砕かれ、主の御前にひれ伏すことから始まり、みこころだけを祈るように変えられました。好きな思いもそれぞれに与えられ、一年後の二〇一〇年九月に御代田で結婚式を挙げさせていただきました。

結婚後は彼の赴任先の福岡県久留米市で新しい生活が始まり、間もなく胎の実を授かりました。つわりが重く、強烈な吐き気が二十四時間続き、食べられずにどんどん痩せていき、脱水症状を起こし、床ずれになりかけました。出産当日まで吐き気とめまいが続きましたが、予定日より九日早く元気な男の子が生まれました。

ようやく苦しみから解放されたと思った矢先、今度は出産二時間後に大出血を起こし、救急車で病院に運ばれました。助産師さんのようすや、出血量や痛みから考えて死ぬかも知れないと思いましたが、主がご臨在されているのを感じ、恐れがなく、不思議なほど平安でした。このまま召されたら今夜イエス様に会えるのかと思うと、なんとも言えない嬉しい気持ちにもなり、その一方で、新婚なのにずっと私を介護してくれた浩生さんに、妻らしいことはなにもできないまま乳飲み子を残していくのは本当に申しわけない思いもあり、ただみこころのままにしてくださいと祈りました。翌日には出血が止まり、手術も輸血もせずに済みました。

あなたがたの力を主が喜ばれるからだ。
（ネヘミヤ　8・10）

父なる神に、喜びをもって感謝をささげることができますように。
（コロサイ　1・12）

これらのみことばから、子どもに喜一と名付けました。

産後は貧血がひどく、二年以上体調不良が続きました。リウマチのように手足の関節が痛み、重い倦怠感と疲労感で起き上がれない日もありました。一方、喜一は力も強く、動きも激しく、目が離せない子でしたので、肉体的にも精神的にも限界でした。周りに頼れる人がいないので、イエス様だけに頼るためにこのことが起こされていると思いましたが、「イエス様、助けてください」と祈っても、喜びがなくなり、みことばも心に入らなくなり、祈りも乏しくなり、イエス様よりもこの世のことに関心が向くようになりました。

二〇一三年の十二月に転勤で東京へ戻りましたが、

福岡にいた三年間、私にもっと主への信頼があれば主のご栄光をたくさん見せていただけたのに…と敗北感でいっぱいでした。しかしこれからは実家に近くなり、育児から少し解放されて、交わりや祈りの中に入れば信仰が回復すると期待しました。実際に主の恵みは豊かなのですが、以前のような湧き上がる喜びは戻りませんでした。十字架によって罪から救い出されたこと、主に愛されていること、イエス様といつか必ずお会いできるという事実が私の中で薄らいでしまったように感じられました。

「主は生きておられる」35号でベック兄が、信者に対する御霊の働きについて「御霊の満たしこそが大切である」と書かれているのを読みました。御霊の満たしとは主に支配されることであり、全き献身によって、また古い人が死に渡されることによって、御霊の満たしを受けることができる。と書かれていました。

私は肉体的な試練によって、楽になりたい、自分自身を喜ばせたいという罠にすっぽりとはまっていたのでした。それは私の肉を満足させることであり、御霊によって歩むことの正反対であり、感謝も喜びもないのは私の肉が生きているからだとようやく気づかされました。また日々の歌の220番の「主イエスにまみえる日の喜びよ」という歌詞を聴いているとき、こんなどうしようもない者を愛し続けてくださる主イエス様にお会いできると思うと、胸がいっぱいになりました。喜びは、私の内から出てくるのではなく、御霊の働きであり、主が与えてくださるものだと改めて知ることができて感謝でした。

ある日曜日の福音集会の後、三歳の喜一が集会から行方不明になりました。すぐにその場にいた十数人の兄弟姉妹が手分けして捜してくださいましたが見つかりません。恐怖で押しつぶされそうになりましたが、静まって祈ると平安が与えられました。最悪なことがあれこれ頭をよぎるのですが、平安のままでした。

10人の証し

Unser HERR lebt

眠ることもない。

（詩篇　121・4）

このみことばを、主が喜一にも語ってくださっていると思うと、本当に感謝です。今回の迷子も主が守っていてくださいました。喜一は集会近くの交番でしばらく保護され、パトカーで警察署に移送されていました。私は喜一を急がせたいときに、「先に行っちゃうよ」、「置いてくよ」という言葉を無意識に使っていたのですが、それが彼に一人にされる恐怖を与えていたということを示されました。迷子になったのは、遊んでいる最中に私たちに置いていかれたと思い込み、あわてて集会から飛び出したためだったそうです。

主のみことばに従う子になって欲しい、主が愛されていること、主が彼を決して見捨てないことを知って欲しいと願いながら育てていたはずなのに、口からまったく正反対の言葉が出ていました。イエス様に対しても、喜一に対してもごめんなさいの一言しかありません。

以前、喜一がまだハイハイをしていたころ、銀色に光る棒を握りしめてこちらにやってくるので、ボールペンかと思い、急いで回収したら鋭利な刃がむき出しのカッターでした。手が届かない所に入れていたのですが、よじ登って取ったようでした。なんでも口に入れてしまうころでしたし、私の所まで十メートル近くハイハイしてきたので、口や首が切れていてもおかしくない状況でしたが、まったくの無傷でした。このとき、イエス様が「わたしは喜一から目を離しません。あなたは完全にこの子を守ることはできないけど、わたしにはできます。あなたは一人ではない」と語ってくださいました。

たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。見よ。わたしは手のひらにあなたを刻んだ。

（イザヤ　49・15〜16）

見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、

せんでした。

主からいただいた性質によって、たびたび夫である浩生さんを混乱させ、戸惑わせることがありますが、彼はミスを指摘することもなく、さりげなくフォローしてくれ、不可解な点は理解し受け入れようとしてくれるので感謝です。

私の肉は簡単に罪を犯すものでしかありません。しかしその私に主が御霊を与え、肉によって歩まない道を備えてくださっていることを感謝します。自分自身から目を離し、常に目を覚ましていられるよう祈り続けていきたいと思います。

次のことばは信頼すべきことばです。

もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。…私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。

（2テモテ　2・11、13）

わたしは盲人に、彼らの知らない道を歩ませ、彼らの知らない通り道を行かせる。彼らの前でやみを光に、でこぼこの地を平らにする。これらのことをわたしがして、彼らを見捨てない。

（イザヤ　42・16）

村上玲子（むらかみれいこ）
国立市立第八小学校
晃華学園中学校・高等学校
北里大学医療衛生学部リハビリテーション学科卒
夫：浩生（こうせい）　子：喜一（きいち）、真知（まち）

10人の証し

Unser HERR lebt